

雪舟の画室「豊後・天開図画楼」所在地考

長田 弘通

- はじめに
- 一 雪舟の生涯
 - 二 豊後における雪舟の活動
 - 三 豊後・天開図画楼の所在地
- (一) 『天開図画楼記』の解釈
- (二) 先行研究の整理
- (三) 「豊府」＝府中の範囲と守護所
- (四) 「豊府西北の隅」とは
- (五) 結論―自説の提示
- さいごに

はじめに

雪舟。言わずと知れた、室町時代に活躍し、日本美術史にその名がさん然と輝く、水墨画の巨匠であり、時には「画聖」とも称されている。現存する作品のうち、国宝に六点、国の重要文化財（以下、重文）に一九点が指定されている。国宝に指定されている絵画作品は一六〇点（平成三〇年四月一日現在）であるが、作者個人としての作品数は雪舟が最も多い。また、室町時代制作の国宝絵画は一四点で、実に約四三％が雪舟作品となる。指定文化財の点数をとってみても、日本美術史上、雪舟がいかに突出した存在であるかがわかるであろう。

その雪舟、実は文明八年（一四七六）前後、年齢にして五七歳前後に大分に滞在、「てんかいとがろう天開図画楼」と名付けた画室を設け、作画活動を展開していた。このことは大分の歴史を語る時、室町時代における文化面での重要な歴史事象として紹介されている⁽¹⁾。

特に作画活動の拠点であった画室・天開図画楼の所

在地について、古くは明治時代から多くの研究者が考察し、さまざまな説を提示している。しかしながら、現在にいたっても、確定されていない⁽²⁾。

本稿の目的は、天開図画楼の所在地について、これまでの研究成果を整理し、新しい推定地を提示することである。その際、室町時代、府中と呼ばれていた豊後国中心部の範囲を踏まえ、所在地を示す唯一の史料である呆夫良心の『天開図画楼記』を虚心に解釈することが重要と考える。

一 雪舟の生涯

本論に入る前に、豊後來訪を含め、雪舟の生涯について述べておこう。ただ、筆者は歴史学（文献史学）が専門であり、雪舟作品の芸術性を語る能力はない。ここでは、まず一般的な雪舟の年譜を簡単に述べることで、その生涯と業績の紹介にかえたい⁽³⁾。

雪舟は応永二七年（一四二〇）、備中国賀陽郡赤浜（岡山県総社市）に生まれた。幼くして、出生地近くの臨

濟宗宝福寺に入ったという。涙で描いたネズミが本物そっくりであったという有名な「伝説」はこの宝福寺修業時代のものである。一〇歳頃に上京したといわれるが定かではない。時期は不明であるが、最初京都五山第四位の東福寺へ入り、その後第二位の相国寺へ移ったようである。相国寺では、住持（住職）の春林周藤の下で禅の修行に励み、賓客対応を担当する「知客」の職を務めるようになるとともに、同寺の画僧・周文に絵を学んだ。

しかし、画僧としてなかなか認められず、三五歳となった享徳三年（一四五四）頃、周防・長門（ともに山口県）・石見（島根県）・筑前（福岡県）・豊前（福岡県・大分県）五か国を支配する守護大名大内氏を頼り、その本拠地山口に移った。山口では雲谷庵という画室を設け、大内氏やその家臣、周辺寺院からの求めに応じて、作画活動を展開した。そして、長祿元年（一四五七）頃、道号を「拙宗」から「雪舟」に改め、法諱と合わせ、雪舟等楊と名乗るようになった。ちなみに、

法諱とは出家した際に与えられる法名、道号はある程度
の僧位に進んだ際に与えられる二字の号である。た
だ、「雪舟」の道号は与えられたものではなく、自分で
改号したものであった。

山口での活動が一〇年以上経過した応永元年(一四
六七)、雪舟は水墨山水画の本場中国へ渡航する機会を
得た。

室町時代、中国・明との通交は幕府が派遣する船Ⅱ
遣明船(後に正式な派遣船であることを証明する「勘
合符」の所持が義務付けされたため勘合船とも呼ばれ
る)に限られていた。通交初期は幕府のみが派遣して
いたが、永享四年(一四三二)の第九次船からは幕府
派遣船のもと、有力守護大名や寺社が個別船の運営主
体として参加するようになった。

雪舟が渡航した応永の第一二次船は禅僧の天与清啓
を正使とする幕府船、幕府管領細川氏派遣船、そして
大内氏派遣船の三艘で構成されていた。大内船の派遣
スタッフは当然大内氏が選ぶ。雪舟は作画活動の庇護

者大内氏から派遣使節団の一員に指名されたのである。
日本を出発した使節団はまず中国南部の寧波にんぽに到着。

ここで貿易品である積み荷を降ろし、皇帝へ謁見する
ため北京へ向かうことになるが、通常その許可が出る
までの約二か月間、寧波に滞在する。寧波滞在中、雪
舟は近隣の禅寺・天童景德寺を訪問し、「首座しゆそ」の称号
を与えられている。首座とは住持のもと、修行面を統
括する西班せいはんの責任者。日本の禅寺ではこの首座になる
ことが諸寺の住持に就く大前提であり、重要な僧職で
あった。雪舟に与えられた称号は実質的なものではな
く、名誉職であったであろう。ただ、雪舟は帰国後制
作した絵にしばしば「四明天童第一座」(寧波天童寺の
首座)と署名しており、この名誉職を自己をアピール
する材料として利用していたようだ。

北京へ上る許可が出ると、二か月ほど大運河を船で
遡る。ようやく北京に到着すると、皇帝への謁見など
の公式行事が続く中、本来の目的である貿易、すなわ
ち、皇帝への進貢品に対する下賜品としてどのような

品物が適切かの交渉が行われた。大内使節団は途中進貢品の一部を海難で失い、見返りの下賜品が想定より少なかったため、増額を求め交渉が難航、一年以上北京に滞在したようである。

雪舟の渡航目的は絵を学ぶという個人的なものではなかった。大内氏派遣使節団の一員として、各種外交儀礼の中で、明政府の重要人物に自作の絵を贈ったり、帰国後の報告のため、目にした景勝地の風景、中国人や他国の使節団の風俗、珍しい動物などをスケッチしたりするなど、公務としての制作で多忙な日々を送っていたことであろう。そのような活動の一端がうかがえるのが、滞在中に制作し、「光澤王」の鑑蔵印がある「四季山水図」四幅（重文、東京国立博物館蔵）であり、「唐土景勝図巻」・「国々人物図巻」（ともに京都国立博物館蔵）である。

一方、多忙とはいえ、寧波や北京での滞在は数か月に及んだ。公務の間隙をぬって、当時の中国で流行していた浙派の作品や前代の宋元画を見て、模写するな

ど中国画を勉強したと考えられている。

このような活動をとおして、雪舟の名は明政府の間でも知られるようになったようで、北京滞在中、日本使節団を所管する役所である礼部の試院という建物の壁面を飾る絵を描いたと伝えられる。

北京での外交・貿易交渉を終えた使節団一行は、蘇州や杭州などの名所を観光しながら、大運河を下り、寧波へ到着。文明元年（一四六九）帰国の途についた。

帰国した日本は応仁・文明の乱の真ただ中。大内氏当主政弘も西軍方として大軍を率いて京都へ出陣中で、山口を留守にしていた。それでも、大内氏派遣使節団は復命のため山口に帰着したと考えるのが自然であろう。

雪舟の動向はその後しばらくははっきりしていない。次に活動が確認できるのが、文明八年（一四七六）の豊後滞在である。豊後滞在中の様子については後述するが、雪舟がいつ豊後に来て、いつ離れたかもわからない。画室を設けている点からすれば、数か月といっ

た短期間ではなく、文明八年をはさんで数年間にわたったと考えられる。

そして、文明十一年には山口に戻った。以後、山口を拠点にしながら、同一三年に美濃国（岐阜県）・駿河国（静岡県）、その翌年には出羽国（秋田県）から京都と各地を旅し、行く先々で取材した作品を残している。

山口での画室の名も豊後と同じ天開図画楼。文明八年（一四八六）の「四季山水図巻」（別名「山水長巻」。

国宝、毛利博物館蔵）をはじめ、国宝となっている全六点は山口の天開図画楼を作画拠点としていた六〇歳代から七〇歳代の頃に描かれている。

文亀元年（一五〇一）頃、雪舟は、古くから歌に詠まれ、名勝として知られていた丹後国天橋立（京都府宮津市）を訪問、その後、橋立とその対岸に点在する寺社を描いている（「天橋立図」。国宝、京都国立博物館蔵）。この時、雪舟は八〇歳をこえており、多くの旅を重ねてきた雪舟にとって、確実なところでは最後の旅となった。

実は雪舟の没年もはっきりしていない。わかっているのは永正四年（一五〇七）三月時点ですでに没していることだけである。これはこの時に、友人・了庵桂悟が山口を訪れ、雪舟の山水図に彼を追悼する詩を書いていることによるのであるが、一般にはその前年の永正三年（享年八七）か、少し前の文亀二年（一五〇二）享年八三）に没したといわれている。

二 豊後における雪舟の活動

中国から帰国した雪舟が文明八年前後、豊後に滞在していたことは前述のとおりである。年齢でいえば、五七歳前後のことであった。

豊後における雪舟の活動の様子を伝える唯一の史料が呆夫良心の『天開図画楼記』である⁽⁴⁾。呆夫良心は第一二次遣明船で雪舟とともに中国へ渡航した禅僧。その呆夫良心が文明八年三月、豊後滞在中の雪舟のもとを訪れ、足かけ三年に及ぶ中国滞在の苦楽を共にした「友」との再会を喜び、『天開図画楼記』を記したの

であった。「画師楊公雪舟」ではじまる文章は、画僧雪舟に対する称賛のことばであふれている。漢詩文として書かれており、難解な部分もあるが、要点をまとめると次のようになる。

(1) 豊府西北の隅に小楼を建て、天開図画楼と名付けた。それは眼前に海が広がり、背後には山々が連なる。そして左側に孤城がそびえ、右には二水が流れる場所であった。

(2) ともに渡った中国では、天下の名山・大河を目の当たりにし、首都や州府の繁栄ぶりや各国使節団の風俗、珍しい文物や動物などを細かくスケッチした。

(3) 一般に名だたる画師は一二の画法を用いるとされるが、雪舟はそれらを備えた上で、作品は真に迫っており、これ以上のものはない。

(4) その上で、唐代の呉道玄、北宋代の易元吉、南宋代の梁楷・馬遠・夏珪・牧谿・玉潤、元代の銭舜举・高彦敬など中国の著名な画師たちの筆法を学

び、これを会得していた。

(5) 中国滞在中には、北京の礼部試院の壁面を飾る絵を担当長官の命により描いた。長官が言うには、「この施設は三〇か国以上の外交使節団が利用するが、雪舟の絵ほど素晴らしい絵を見たことはない。また、ここでは官僚登用試験である科挙も行っている。私は、受験生に必ず、「この絵は日本人の雪舟が描いた優れた作品である。外国にこれほどの名画師がいる。みなも今後それぞれの分野で今後精進してこの域に達しなければならぬ」と論じている」とのことで、雪舟の絵は本場中国でも称賛されている。

(6) 中国でも認められている雪舟のもとには、身分の高い大名や武士、僧侶、商工業者などが、わずかな絵を求めてひっきりなしにやって来る。

(7) 豊府の天開図画楼内を覗くと、絵具箱や画筆、丸められた大小の紙や絹が所狭しと置かれており、壁には表装された画軸が掛けられていた。その中

で、雪舟は一日中絵具を溶いては描き、それに疲れると、欄干にもたれ襟を開き、風にあたって気分を癒した。

(8) 雪舟の画系をたどれば、如拙の孫弟子、周文の弟子となる。「青は藍より出でて、藍より青し」（弟子が師匠の学識や技量を超えていることの例え）とは、まさに雪舟ことを言うのである。

豊後に関する記述は(1)と(7)。天開図画楼所在地の検討を課題とする本稿において、重要な記述はいうまでもなく(1)としてまとめた部分である。ただ、(1)の内容を検討する前に、(7)に記された豊後・天開図画楼での作画活動について触れておきたい。

(7)で記された内容を読む限り、雪舟は豊後の天開図画楼において作画三昧の生活を送っていたようである。また、(6)の内容はあくまで一般的な状況を述べたものであるが、豊後においても同様であったと考えるよいであろう。

(6)と(7)を踏まえれば、豊後においても当然多くの作

品が生み出されたはずである。しかし、豊後で描いたことがわかつている作品は「鎮田滝図」ちんだのたきずの一点のみ。

これは沈墮滝（豊後大野市）とも呼ばれる、大分県の大野川水系にある名瀑を描いたものである。大正時代、東京在住の個人が所蔵していたが、大正一二年（一九二三）の関東大震災で焼失してしまった。ただ、幸いにも残された焼失前に撮影されたモノクロ写真と、江戸時代前期の幕府御用絵師・狩野常信が原寸大で精巧に模写した図（京都国立博物館蔵）により、雪舟原本の姿を知ることができる。

沈墮滝は高さ約二〇m、幅約一〇〇mの雄滝と高さ約一八m、幅約四mの雌滝からなる。この二つの滝、実際は数百m離れているが、雪舟は隣り合うめでたい夫婦滝のように描いている。実景を取材しながらも、雄大な滝と周辺の岩山が織りなす風景を「山水図」として効果的に表現する構図を選んだものと考えられる。当時の画師は注文に応じて作画するのが一般的であり、「鎮田滝図」も誰かの依頼・発注を受け、描かれた

はず。しかし、依頼主・発注者が誰かはわかっていない。そのような中、江戸時代末から明治時代初期に活躍した、豊後の国学者であり、博物学者であった後藤碩田が豊後国内の名勝旧跡についてまとめた「豊後国古蹟名寄」の「沈墮瀧」項には次のような逸話が紹介されている⁽⁵⁾。

僧雪舟が爰に來たり、瀧の真景を写せしもの有り
とぞ、大友氏に伝ふ、後、肥後加藤氏に送れり、
加藤氏亡ひて、徳川の御物になり、後、津軽家に
賜ふとぞ、山鹿素行の話あり、岡、中川家に狩野
常信が雪舟の図を再模せしもの有とぞ聞ゆる

これによれば、雪舟の「鎮田滝図」は元々大友氏に伝わっていたが、熊本藩主加藤氏に贈られた。加藤氏滅亡後は徳川將軍家が所蔵するところなり、その後、弘前藩主津軽氏に下賜された。そして、この話の典故は江戸時代前期の軍学者・山鹿素行である。さらに、雪舟の図を狩野常信が模写したものを岡藩主中川氏が所蔵しているらしい、というのである。

大友氏は、いうまでもなく、鎌倉時代から続く豊後国守護、すなわち豊後国支配者で、雪舟が滞在していた頃の当主は一六代政親であった。そして、江戸時代、沈墮瀧の所在地は岡藩領であった。

後藤碩田が記した逸話を基に、想像をたくましくすれば、「鎮田滝図」原本と模本の伝来は以下のようにも考えられる。雪舟作の原本は大友政親の依頼により描かれた。その後、加藤氏、徳川將軍家と伝来し、江戸時代前期には、遠く弘前藩主津軽氏が所蔵するに至った。そして、自分の藩領内にある名瀑を雪舟が描いた図があることを知った藩主中川氏は、原本を譲り受けることは難しいと考え、幕府御用絵師の狩野常信に模写図の作成を依頼し、模本を持つことで自藩の誉れとした。

雪舟「鎮田滝図」とその模本の伝来を語るとして、これ以上完璧なストーリーはないと思われる。正直、「出来すぎた」逸話であろう。後藤碩田は原本伝来の典故を山鹿素行の話とするが、山鹿素行のどの著作物

にこの逸話が記されているのか、浅学のため、確認できていない。また、狩野常信の模本は個人から京都国立博物館に寄贈されたものであるが⁽⁶⁾、それ以前の伝来過程については調査できていない。

碩田が記した伝来由緒は、大分にとってたいへん興味深いものの、真偽は不明として、紹介するに留めた

三 豊後・天開図画楼の所在地

(一) 『天開図画楼記』の解釈

さて、いよいよ、本稿の目的である、雪舟が豊後における作画活動の拠点とした、天開図画楼の所在について考察を進めて行こう。

所在地考察の根拠となるのは、呆夫良心『天開図画楼記』の要点の(1)として先に示した部分のみである。いくつか考察の細かいポイントがあるので、当該部分の読み下し文を示そう。

画師楊公雪舟、勝地を豊府西北の隅に相攸し、一

小楼を^{そうきく}剞作し、題傍して天開図画と曰う、滄海前に接し、群峰後に連なる、孤城左に^{ぼく}聳え、二水右に流れる、――

まず、直線傍線部の意味を字句に添いながら確認しておこう。「楊公雪舟」は、通称、道号+法諱で表記される名(雪舟等楊)を、法諱+道号に逆転させ、かつ、等楊の「楊」に敬称である「公」を付した呼称で、雪舟本人をさす。「勝地」とは「①最も適した場所。②景色のよいところ」の意味があるが、ここでは「画室に適した景色のよい場所」と解釈できよう。「相攸」は、熟語では「女子が嫁ぐ処を選ぶ」との意味。「相」と「攸」を一字ずつ分け、「攸を相し」と読んでも、「相」には「選ぶ」、「攸」には「ところ。所」の意味があり、「所を選ぶ」となる。「剞作」の「剞」は「剞」の俗字で、「剞」には「はじめる」の意味があり、「剞業」で創業、「剞造」で創建となる。よって、「剞作」は「剞作」＝創作で、「新しく作った」との解釈でよいであろう。最後に「題傍」は「札に書き記す」との意味である。直

線傍線部の意味をとれば、「雪舟は画室に適した景色がよい場所を、豊府西北の隅に選んで、小さい楼を新しく作り、札に天開図画と書き記している」となる。

続く点線部では、天開図画楼からみえる四方の景色を説明する。その意味は、楼の前は「滄海」、青々とした海原が広がり、背後には「群峰」、群がりたつ山々が連なる。そして、左手には「孤城」が聳え、右には「二水」、二筋の川が流れる、となる。

ここまで解釈を意図的に省略してきた個所がある。それは天開図画楼の具体的所在地を示す「豊府西北の隅」である。この部分を慎重に解釈することが本稿の結論に通じるのであるが、ここでは、まず、「豊府」との意味を確認しておきたい。

「豊府」とは「豊とよの府」のこと。「豊」は豊後国の略、「府」の一義的な意味は「くら。倉庫」であるが、「役所」、「人や物の多く集まるところ。物事を中心」、「みやこ。まち」等の意味もある。つまり「豊府」とは、豊後国の役所があり、政治的・経済的な中心地、都と

も呼ぶべき場所を意味している。では、雪舟が豊後国滞在していた文明八年前後、幅をとって、室町時代において、豊後国の中心地、都とも呼ぶべき場所はどこか。それは、古くは豊後国こくが衙・国府所在地であり、当時は守護大友氏の拠点Ⅱ大友館が置かれ、府中と呼ばれていた地域に他ならない。その詳細な推定範囲については後述するが、概略、現大分市内、大分川下流左岸の平地部とその南に位置する上野台地を含む地域であった。

呆夫良心『天開図画楼記』の所在地に関する記述の要約を再度示すと、「雪舟は、豊後国の政治経済の中心地、当時府中と呼ばれていた地域の一角、景色のよい所に画室を設け、天開図画楼と名付けた。それは、前方は海、背後は山々、左手に孤城が見え、右に二筋の川が流れている場所であった」となる。

(二) 先行研究の整理

「はじめに」で述べたように、天開図画楼の所在地について、『天開図画楼記』の上述部分をもとに、明治

時代からさまざまな説が提示されてきた。自説を展開する前に、これまでの代表的な先行研究を整理してきた。なお、これら先行研究から引用するにあたり、時代の経過により、変化している地名や施設名などについては、筆者が()で現在の名称を補足する。また、先行研究が提示する天開図画楼推定地を現在の地図上に示した図3・4を一七頁に掲載している。

管見の限り、最初に天開図画楼所在地について言及したのは、沼田頼輔『画聖雪舟』(明治四五年二月・一九一二年刊)である(7)。同書において沼田は、天開図画楼が設けられた場所を「今の大分町(大分市中心部)より北行四、五町を隔てた上之原(上野台地)」というところであるかと思われる。この処は小高き丘陵で眺望の極めて宜しきところである」とし、前方の海は菡萏湾(別府湾)、背後の山々は四極山しほっさん(高崎山)、左手の孤城は高崎城(高崎山山頂)、右手の二筋の川は大分川に比定している。

沼田は自説を提示した上で、大分の郷土史家二名が

唱えている説を紹介している。一人目は佐藤鶴谷(佐藤蔵太郎)の「元龜年間(戦国時代 一五七〇〜七二)に、上野台地上の真言宗・金剛宝戒寺付近にあつたされる清幽亭という一小亭が天開図画楼の遺物ではあるまいか」との説。二人目は日名子柚軒(日名子太郎)の「七十二連隊兵營の近傍の丘上」との説である。日名子説を補足すれば、七十二連隊とは明治四一年(一九〇八)

に当時の大分町に設置された陸軍歩兵第七二連隊のこと、その兵營地は現在の大分大学教育学部附属小・中学校一帯(大分市王子新町、以下、附属小・中学校と略記)であり、その近傍の丘上とは、西側の大分市高尾台及び高崎付近をさしていると考えられる。

これにより、沼田頼輔が『画聖雪舟』を著す以前に、地元の郷土史家二名が天開図画楼所在地に関する論考を発表していたことがわかるが、それぞれの典拠文献が示されていないため、原典を確認することができない。

沼田は周囲の景観について、背後の山々を四極山Ⅱ高崎山としながら、左手の孤城を高崎城(中世後期、高崎

山頂に築かれていた山城」とし、明らかに矛盾を起こしている。『画聖雪舟』を著すにあたり、沼田が現地を訪れていることは文章からうかがえるが、どれほど正確な情報を得ていたのか一抹の不安を覚える。いずれにしろ、先行する佐藤・日名子両名の説を踏まえ、上之原Ⅱ上野台地は眺望がたいへんよいところで、その地形は『天開図画楼記』の記述に一致するとの理由で、天開図画楼は上野台地上にあったと考えていた。

そして、沼田に先行する佐藤蔵太郎は上野台地上でも金剛宝戒寺付近、日名子太郎は現附属小・中学校西側の丘陵上と考えていたことが確認できる。

沼田について、詳細な研究を発表したのは、戦前、大分県史蹟名勝天然紀念物調査委員を務めていた工藤覚次である。工藤は「豊後に於ける雪舟の遺蹟」⁽⁸⁾において、次のように論を展開している（なお、要約文中の〈〉は工藤が付した補注である）。

○豊府とは、豊後の府衙たる大友氏の居城即ち上野館、府内館、大友館或いは西山城、豊府城、大友

城などと呼ばれている、今の_{大分市}大字上野字御屋敷を中核とし、大友氏時代の絵図面に見える大友役所並に蔵場を中心として最南の三宝院町〈今の元町の南端〉、最西北端の長池町、東北方の坊ヶ小路町等の四十余町を含んだ附近一帯の地域を総称したものであろう。

○豊府西北の隅とは、西は丘陵、北は海で限られた一隅に位置している、古来勝地として詩歌に吟詠されている笠結島^{かさゆい}、今の菡萏小島（_{大分市}生石港町二丁目）近くの丘陵の崖頭のあたりさしたものであろう。

○「滄海前に接し」とは菡萏の滄海、「群峰後に連なり」とは靈山、有蔵、本宮等の山々、「孤城左に聳え」とは高崎山山頂の高崎城、「二水右に流る」とは大分川の本流と分流が右方に流れているのをさしたものである。

○大友氏時代の絵図面を見ると、二つ川が並行して流れている。その東側の川に大川筋の記入があり、

今津留村（大分市今津留・西浜・大津町など）の東を過ぎ、沖之明神島の東で海に注ぐ。西側の川は今津留村の西を流れ、長池（大分市大手町二丁目）の舟入、長浜宮（大分市大手町三丁目）の北を迂回し、湊舟入の辺より右折し、沖之明神島の西にて海に注いでいる。

○以上の点から、天開図画楼の所在地は笠結島、今の菡萏小島から数百歩（約九〇〇m前後）の距離にある丘陵の崖頭あたり（大分市上白木付近）と思われる。

以上のように、工藤は「大友氏時代の絵図面」を基に、豊府の範囲と四方景観のうち、「二水右に流れる」の部分の考証し、天開図画楼の所在地を、現在の西大分地区、別府湾を直接臨む丘陵の先端付近と推定している。

工藤がいう「大友氏時代の絵図面」とは、戦国時代、府内と呼ばれた豊後の中心部を描いた「戦国府内絵図」（「府内古図」とも呼ばれるが、本稿では「戦国府内絵

図」で統一することであろう。「戦国府内絵図」は数種類が現存し、書き込まれた情報から大きく三つに分類されている（9）。三分類のうち、通常C類とされる絵図（図1。大分市歴史資料館蔵）をみると、大分川の本流・分流が工藤の説明どおりに流れており（A・B類には分流のみしか描かれていない。図2参照）、工



図1 「戦国府内絵図」C類

（大分市歴史資料館蔵）



図2 「戦国府内絵図」B類

(大分市歴史資料館蔵)

藤が考証の基礎とした「大友氏時代の絵図面」が「戦国府内絵図」C類であったことは容易に想像がつく。後述するが、工藤が示した豊府Ⅱ府中の範囲、及び四方景観の比定は概ね妥当である。ただし、府中の範囲を上述のように捉えながら、その「西北の隅」をなぜ西大分の菡苜小島（笠結島）付近とし、天開図画楼の所在地をその近くの丘陵の先端と考えたのかは検討の余地がある。

戦後、天開図画楼の所在地に言及したのは、大分県地方史研究会創立時（一九五四年）の主要メンバーであった立川輝信である。立川は「雪舟と大分県」との論考で、以下のように、それまでの説を整理しつつ、自説を提示している（30）。

【豊府の範囲】

○当時の府内をさし、今の元町より坊ヶ小路辺（大分市錦町付近）に至る大分川に沿った街である。

【所在地諸説】

(1) 上野台地（上原）

∴ 一般的な説

① 大分大学経済学部（現大分県立芸術文化短期大学、以下、県芸文短大と略記）付近

② 金剛宝戒寺付近

(2) 大分大学学芸学部（現附属小・中学校）西側台地

∴ 日名子太郎説

(3) 西大分・豊崎（笠結島近くの丘陵先端）

∴ 工藤覚次説

【立川説】

○『天開図画楼記』が記す四方景観には上野台地が一番よく合致している。

○雪舟が万寿寺住持の桂庵玄樹を頼って来たとして、万寿寺の近くである上野台地が雪舟にとって都合がよい。

○上野台地は当時の府内の市街地に程近く、しかも景観もよく、閑静で画楼を設けるのに適地である。

○工藤説の西大分・豊崎は、当時、眼前には瓜生島があり、神宮寺浦が近く、柞原参道を経て別府に通じる地点で閑静ではなく、且つ瓜生島の景観に少しも触れられておらず、高崎山は左手後ろになり、見えていない。また、万寿寺に遠く、文人墨客が訪ねる地点としては上野台地に比較して条件が悪い。

○日名子説の学芸学部西側の丘陵は付近に人家は少なく、交通も悪く、人の住むにははなはだ不便であったと思う。雪舟は画楼を営む地として選ばな

かったと考えられる。

○立川説と従来の上野台地説との相違点

(1) 大臣塚は今でも万寿寺の所有地で、当時は蔣ヶ池いけから続いてその境内であったから、「あけぼの寮」付近(芸文短大南側。平成六年に移転し、現在は空き地)がよいと思うが、豊府の西北隅とは言えない。

(2) 上野変電所西隣の字「壇の元」一帯の台地(壇ノ本。大分市上野丘一丁目付近)か、墓地公園の高台と推定するが、墓地公園とすれば大友屋形(上原館)を眼下にするので、壇の元が有力ではないかと考える。

以上、立川はまず、上野台地説が一般的な説であるが、上野台地上でも、現県芸文短大付近と金剛宝戒寺付近の二説に分かれるとする。前述したように、金剛宝戒寺付近説は佐藤蔵太郎が提示していたことが知られる。一方、管見の限り、現県芸文短大付近を候補地とする論考は確認できていない。当時、郷土史研究者

間の話題の中で現県芸文短大付近説を提示する人がいたであろう。

次に、日名子説・工藤説を紹介した上で、これらを諸条件が悪いと退け、結果、上野台地が最適地であるとする。ただ、上野台地上でも、「あけぼの寮」付近は万寿寺ゆかりの地に近く、適地だと考えるが、「豊府西北の隅」とはいえないと否定し、字壇ノ本付近が有力としている。

立川の論述で注目すべきは、「あけぼの寮」付近説を「豊府西北の隅」ではないとの理由で否定している点である。工藤覚次も「豊府西北の隅」に着目しながら、それを西大分の笠結島付近としていることについては先に検討の余地ありとした。一方、立川は豊府Ⅱ府中の範囲を工藤よりも狭く捉え、県芸文短大南側を「豊府西北の隅」とは言えないとし、県芸文短大より北西にある字壇ノ本付近を推定地としている。立川が示す豊府の範囲の中で字壇ノ本が西北にあたるのか、正直疑問である。ただ、立川が論文を発表した当時、守護

大友氏の拠点Ⅱ大友館と捉えられていた場所（現在は上原館と呼ぶ。室町時代の大友館所在地については後述する。図4参照）からみれば、県芸文短大南側は西北とはいえず、字壇ノ本付近はまさしく西北にあたる。立川は豊府の中心である大友館（現上原館）からの位置関係で、字壇ノ本付近を天開図画楼所在地と考えたのであろう。

天開図画楼所在地に関する先行研究の最後として、大分県の代表的通史である『大分県史』の説を紹介しておこう。

まず、『大分県史 中世篇Ⅱ』（二）では「天開図画楼の所在地について現在のところ大きく二つの説がある」とし、上野の台地とする説と西大分の丘陵地とする説を紹介している。その上で、「豊府の西北隅」を当時の中心であった現在の太田市元町付近から類推してみると、西大分付近ということになる。「この点上野の台地とする説にはやや難点がある」とする。結論としては、「現時点で比定するにはやや無理があるので、今



図 3 先行研究における天開図画楼所在推定地



図 4 上野台地上の天開図画楼所在推定地

後の調査にゆだねる」とするものの、『天開図画楼記』の「豊府西北の隅」に注目し、それは西大分付近が適当であり、上野台地説には難点がありとの記述からは、西大分付近が有力と考えていたと思われる。

(三) 「豊府」Ⅱ府中の範囲と守護所

豊後・天開図画楼の所在地をめぐる代表的な先行研究は以上のとおりである。これら先行研究が提示する所在推定地を踏まえ、自説を述べていこう。

何度も述べるが、豊後・天開図画楼の所在地を考える根拠は呆夫良心『天開図画楼記』の勝地を「豊府西北の隅」に選んだとの文言と、所在地の四方景観の記述である。「豊府」とは古くは豊後国衙・国府の所在地であり、室町時代は守護大友氏の拠点Ⅱ大友館が置かれ、府中と呼ばれていた地域であったと、すでに指摘した。天開図画楼の所在地はその「西北の隅」というのであるから、「豊府」Ⅱ府中の範囲を示せば、その場所はずと推定できる。

先行研究においても、工藤覚次・立川輝信・『大分県

史』が「西北の隅」に着目し、所在地を考察していた。しかし、工藤説の「豊府西北の隅」を西大分・菡苜小島付近とする点には検討の余地があると疑問を呈した。また、立川はとも上野台地上の大友館Ⅱ上原館を基準に「西北の隅」を字壇ノ本付近と考えていたようだと指摘した。先行研究の整理から導いた課題、「豊府」Ⅱ府中の範囲、室町時代の^{よりやす}大友館の所在地、この二点を明らかにすれば、天開図画楼の所在地は推定できる。では、まず、「豊府」Ⅱ府中の範囲から検討して行こう。室町時代の府中の範囲については、別に論じたところである(こじ)。府中の範囲を明らかにする論証は複雑であるため、ここでは要旨を紹介するに留めたい。

鎌倉時代中期の建長六年(一二五四)、豊後国守護三代大友頼泰は、恐らく守護所Ⅱ大友館の設置を念頭に僧幸秀らから、半ば強制的に、「高国府地頭職」を手した。しかし、高国府は大友頼泰の叔父・志賀能郷が支配権を持つ「勝津留」を含んでいた。能郷の母・尼深妙(頼泰祖母)は、大友頼泰の高国府地頭職入手によ

り、能郷の勝津留支配が不利益を被ると考え、高国府地頭職の旧所持者である幸秀らにクレームをつけ、能郷の勝津留支配権が制約を受けないことを保証させた。その上で、深妙からの要求があつたのであろう、頼泰も能郷の勝津留支配権を安堵した。

大友頼泰は、恐らく、祖母・叔父との間に多少の軋轢を生むことを承知の上で、幸秀らに迫って高国府地頭職入手を断行した。それは豊後国定住、守護所Ⅱ居館の設置をにらんでの行動であつた（初代大友能直・二代親秀も豊後国守護であつたが、豊後国へは下向してこなかつた）。

ここで、頼泰の高国府地頭職入手の経緯を述べたのは、室町時代の府中の範囲を考える基礎になるからである。まず、狭義の高国府の範囲から述べよう。高国府とは「国府」の文字が示すように豊後国衙に由来する。豊後国衙の所在地は長年の発掘調査によつても特定できていない。しかし、現在も残る古国府ふるこくとこれまで触れてきた高国府との地名から、当初、現在の古国府地

区（上野台地南側平地部）にあつたものが、高台に移転したと考えられている。そして、移転した高台とは古国府地区に程近い上野台地であり、狭義の高国府の範囲は上野台地一帯といえる。国衙移転時期は定かではないが、台地全体の地割関係から、現在の金剛宝戒寺北側にあつた上野廃寺の存在下限である九世紀前半までには移転していたと考えられている。

次に、大友頼泰の高国府地頭職入手の際、高国府に含まれていた勝津留の範囲を示そう。勝津留の範囲は同所の開発に係る平安時代後期の史料四点に示されている。それらによれば、東西南北の境界は、北と東は大分川、南は上野台地南東の崖に彫られた現在の岩屋寺石仏付近、西は岩屋寺石仏の西側から上野台地上り、台地上を南北に貫く道であつた。この範囲を現在の地名で表記すれば、東は大分川左岸の元町東側平地、北は塩九升しよくじょうを含む長浜町北側一帯、南は岩屋寺石仏南側付近、西は現在の県芸文短大の西を通り、顕徳町に下り、塩九升通りの西側に通じる道となる。

大友頼泰が地頭職を入手した高国府とは上野台地と勝津留、概略で示せば大分川左岸の平地部を中心とする地域を含んでいた（図5）。

先に、大友頼泰の高国府地頭職入手は守護所の設置を念頭にしていたと述べた。では、守護所はどこに置かれたのか。

以前は、立川輝信がそうであったように、現在も土塁や空堀が残る上野台地上の小字「御屋敷」の地こそ守護所Ⅱ大友館と考えられていた。しかし、今は上原館と呼ばれるこの地で近年数次にわたり実施された発掘調査によれば、まず土塁の構築年代は一五世紀後半以降、内部で出土した中世の遺構は戦国時代後半の一六世紀半ばから限られ、平安時代から鎌倉・室町時代前半の遺構は現在のところ確認されていない。現時点での発掘調査結果に基づけば、上原館の地に大友頼泰がその守護所を置いたとは考えづらい。

高国府の範囲からいえば、勝津留、すなわち大分川左岸の平地部に居館を置くことも、論理上は、可能で

あったろう。しかし、高国府に内包されているとはいえ、勝津留は志賀能郷の支配下にあり、その内部に居館を置くことは不可能であったと考えられる。また、上原館の地も除外される。となれば、頼泰が守護所を置いたのは、上野台地上の勝津留部分と上原館の地を除いた場所か、頼泰が地頭職を持つ荏隈郷内の上野台地に近い場所であったと推定できる。

さて、大友頼泰は高国府地頭職を入手する一二年前の仁治三年（一二四二）に二八か条からなる武家法「新御成敗状」を制定している（その二年後に出された「追加」一六か条と合わせ、鎌倉大友法と呼ばれる）。この二八か条の内、四か条に「府中」が登場し、内容から「府中」に関わると考えられる条項が六か条ある。

では、豊後の「府中」とはどこなのか。文永六年（一二六九）、大友頼泰は豊後国玖珠郡野上村（大分県九重町）の地頭野上資直に裁判のため「上府」Ⅱ「府」に参上することを命じた。これは「府」に頼泰の守護所が置かれていたことを示している。「府」すなわち豊後

の府中に守護所が置かれていたのである。先に示した頼泰の守護所の場所及び、「府中」は一般に古代の国衙に付随した町を淵源とすると考えられることから、鎌倉時代の府中とは、広義の高国府Ⅱ上野台地及び大分川左岸の平地部分であったと考えられる。

南北朝時代初期、建武三年(一三三六)の史料には府中と高国府が併記されるものがある。この使用例からは府中の中に高国府があり、さらに、高国府で特定の場所Ⅱ守護所を意味することが確認できる。このことは、南北朝時代初期の守護所は上原館地を除く上野台地にあったことを示している。

しかし、建武四年以降、守護所を意味する高国府の使用事例は姿を消す。そして、室町時代になると、府中との表記で守護所を意味する事例が確認できるようになる。このことから、大友氏の守護所は室町時代に高国府Ⅱ上野台地から府中の平地部、言い換えれば、勝津留の平地部に移ったと考えられる。

大友頼泰の時代、勝津留は志賀能郷の支配下にあり、

頼泰が守護所を勝津留の平地部に置くことは不可能であったと述べた。それが可能となったのは、大友氏が勝津留の平地部を侵害し、自己の影響下に組み込んでいったからであった。まさに、尼深妙が懸念していたように。例えば、鎌倉時代後期の徳治元年(一三〇六年)、五代大友貞親さだちかは臨濟宗宗寺院・万寿寺を創建する。「戦国府内絵図」をみると、大分川分流の左岸沿いに万寿寺がある。当該場所(大友氏遺跡・旧万寿寺地区)の発掘調査では、一四世紀前半の遺構と遺物が確認されており、万寿寺の創建場所は「戦国府内絵図」にみえる場所と同一と考えられる。この場所はまさに勝津留内であり、大友氏当主が志賀氏領を侵害していたことを示している。

「戦国府内絵図」にみえる大友館(A類では大友館、B・C類では大友御屋敷と表記されるが、以下、大友館で統一する)の所在地である国指定史跡「大友氏遺跡・大友館跡」の発掘調査によれば、当該地では南北朝時代末期の一四世紀末の建物遺構が出土しており、

それ以降、規模は異なるものの、戦国時代末期の一六世紀末まで継続して大名館にふさわしい遺構が確認されている。この発掘調査結果と文献上の推定を合せて考えれば、南北朝時代初期に上野台地上にあった守護所Ⅱ大友館は、南北朝時代末期に勝津留の平地部、「戦国府内絵図」にみえる大友館所在地に移転し、戦国時代末期まで当該地に存在し続けたのである。そして、勝津留の平地こそが「戦国府内絵図」に描かれた府内の町が形成された場所であった。

これまで述べてきた鎌倉時代中期以降の府中の範囲と守護所変遷を、雪舟が豊後国に滞在した文明八年（一四七六）前後に絞って整理しておこう。雪舟が天開図画楼を設けた時期の豊府Ⅱ府中とは、鎌倉時代までは勝津留と呼ばれ、戦国時代後期に府内と呼ばれる町が形成された、大分川左岸の平地部と上野台地を含む地域であり、大友氏の守護所は「戦国府内絵図」に「大友館」とみえる場所に置かれていた（図5）。

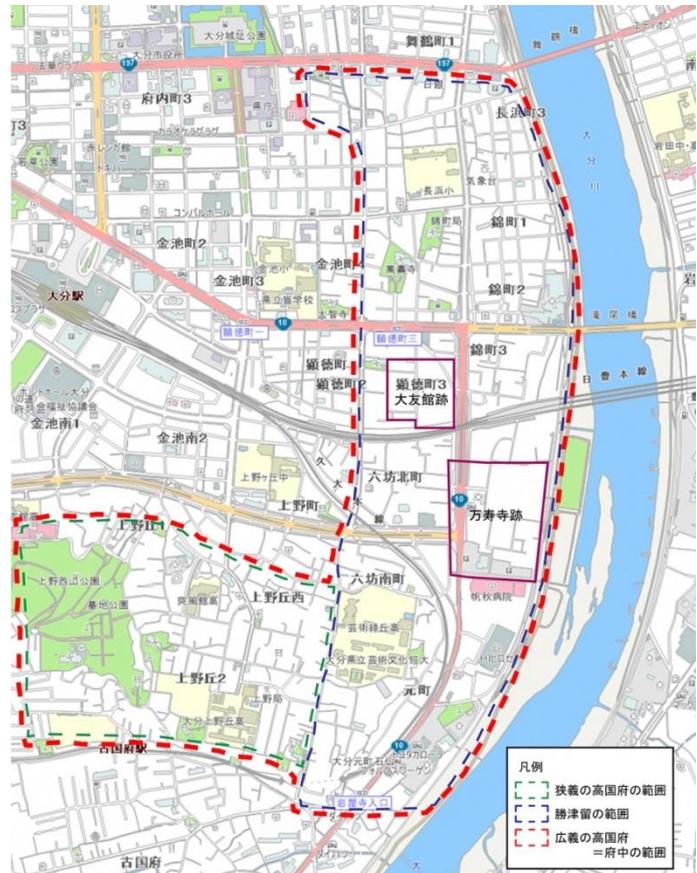


図5 室町時代の府中と大友館位置図

(四) 「豊府西北の隅」とは

雪舟豊後滞在時期の府中が上記のように捉えられる時、天開図画楼が置かれた「豊府西北の隅」とはどこになるか。

ここで改めて「隅」の意味を確認しておきたい。「隅」を『大漢和辞典』で調べると、主に「①すみ・かど。②かた・方角。③きし・崖。④かたわら」などの意味

がある。一方、『日本国語大辞典』では「①かこまれた区域のかど、または、端の方。②その方角のかなた。天の一角」とある。『大漢和辞典』の①と②はそれぞれ『日本国語大辞典』の①と②に対応している。

では、「豊府西北の隅」の「隅」は①と②のどちらの意味で解釈すればよいか。『大漢和辞典』、すなわち漢語としての意味に限れば、②の方角でも「豊府から西北の方角」で意味は通じる。しかし、『大漢和辞典』に対応する『日本国語大辞典』の②「方角のかなた。天の一角」で解釈すれば、「豊府からみた西北方向のかなた」となり、天開図画楼の所在地は特定できない。漢和辞典は漢字・漢語の意味を日本語で解説した辞典であり、国語辞典は日本語の単語・連語などの意味を解説したものである。呆夫良心が「隅」を日本語の意味で使用した、いふなれば、『天開図画楼記』全体を和漢文として著したとすれば、「豊府西北の隅」の「隅」は『日本国語大辞典』の①の意味となり、「豊府〓府中の西北地区のすみ・かど」となる。

室町時代、臨済宗僧侶が著わした漢詩文や著作は「五山文学」と総称される。そもそも中国の禅宗寺院では修行と共に文学の素養が尊重されていた。その風潮が禅宗の教えと共に日本に伝えられ、漢文学の隆盛をみたのである。鎌倉時代中期、中国僧蘭溪道隆らんけいどうりゅうを開山に迎え創建された鎌倉・建長寺では、日常的に中国語が使われていた。同じく、中国僧の無学祖元むがくそげんや一山一寧いっさんいちねいらにより日本の禅宗界にもたらされた漢文学は当然漢語（中国語）で著されていた。中国僧の漢詩文をお手本に広まった日本人禅僧らによる漢詩文も漢語を基本に記述されていたと考えられる。

『天開図画楼記』の作者呆夫良心がどれだけ中国語に通じていたかは不明であるが、同記を漢語で記述した可能性は排除できない。となれば、今問題としている「隅」は漢語の②の意味、すなわち、「豊府西北の隅」とは「豊府からみて西北の方角」との意味である可能性もある。そして、この意味で捉えれば、工藤覚次が唱えた、「豊府西北の隅」を西大分の笠結島〓菡萏小島

付近とし、天開図画楼の所在地をその近くの丘陵上崖頭とすることも可能である。一方で、「隅」が漢語として記述されていたとしても、漢語の①の意味であることも十分あり得る。

禅僧が著わした漢詩文にみえる「隅」を漢語の①と②、どちらの意味で解釈すればよいのか。

「一 雪舟の生涯」で述べたように、文明一一年（一四七九）頃、雪舟は山口に戻り、画室を設けるが、その画室も、豊後府中の画室と同じ、天開図画楼と名付けている。文明一八年、雪舟の友人・了庵桂悟は山口の天開図画楼を訪問し、『天開図画楼記』を著している。その中に「寂寞せきばくの隅えんぎよに燕居す」との一文がある。漢語で、寂寞は「①ひっそりとしたさま。②広々としたさま」、燕居は「くつろいでいること」の意である。この二つの漢語を結ぶ「隅」の意味は「方角」ではなく、「すみ・かど」、ないし「かたわら」で、「寂寞の隅に燕居す」は「ひっそりとした空間、ないし、広々とした空間のかたすみでくつろいでいる」との意味になる。

同じく雪舟に関わる、それも今検討対象としている漢詩文と同じ名前の漢詩文にみえる「隅」が「方角」の意味ではないことが確認できた。

わずか一例であるが、「隅」が漢語（中国語）として記述されたとしても、「方角」の意味はまれであり、「すみ・かど」の意味が一般的であったといえよう。従って、検討対象の「豊府西北の隅」とは「豊府Ⅱ府中の西北地区のすみ・かど」と解釈するのが適切である。

（五）結論―自説の提示

ようやく、本稿の結論にたどり着いた。雪舟が滞在していた時期の豊後の豊府、すなわち府中は大分川左岸の平地部と上野台地を地域であり、守護所Ⅱ大友館は平地部のほぼ中央に置かれていた（図5）。その府中の西北地区のすみ・かどとは、「戦国府内絵図」で海（別府湾）に面して船入と長浜宮がある付近、現在の大分市大手町三丁目付近となる（図6）。

豊後・天開図画楼の所在地を上述の場所に推定した

時、呆夫良心『天開図画楼記』が記す四方景観、「滄海前に接し、群峰後に連なる、孤城左に聳え、二水右に流れる」はどう比定できるか。結論からいえば、先に紹介した工藤寛次の場所比定でなんら問題はない。すなわち、前に接する「滄海」は推定所在地の北に広がる別府湾。推定所在地は大分川分流河口にほぼ接しており、眼前はまさに別府湾であった。次に背後に

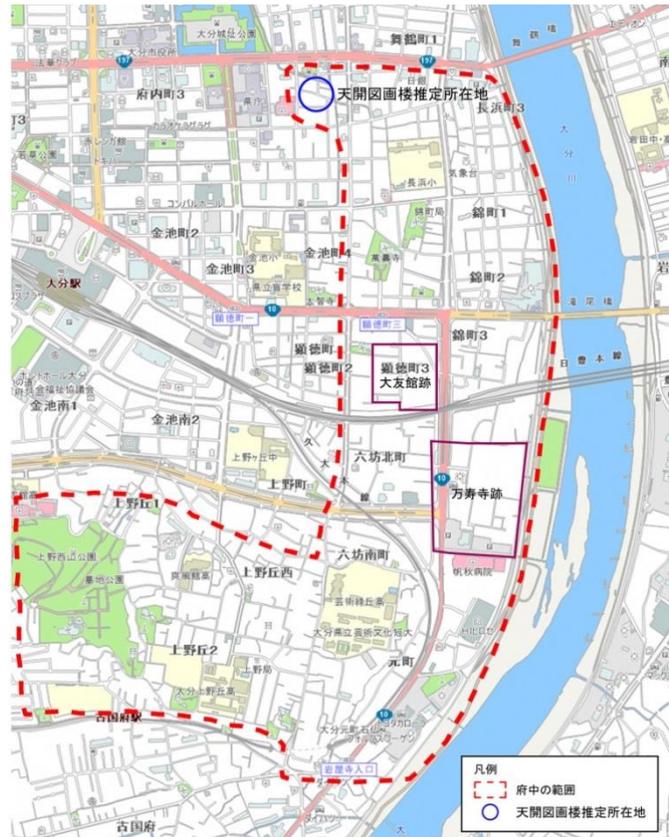


図 6 天開図画楼推定所在地

連なる「群峰」は現植田地区南に連なる霊山（標高約五九六m）・本宮山（同約六〇七m）・障子岳（同約七五〇m）の山々であろう。推定所在地のすぐ背後にみえる高地は上野台地であるが、同台地の標高は高い地点でも七五m前後で、「群峰」とは言いづらい。「群峰」は上野台地のさらに背後にみえる先述の山々と考えられる。そして、左に聳える「孤城」は現在お猿で有名な高崎山の山頂に残る高崎城で間違いない。高崎城は南北朝時代に大友氏により整備された山城で、同時期、北朝方の拠点となり、たびたび南朝方の攻撃を受けた。戦国時代最末期の天正一四年（一五八六）、戸次川の戦いで島津軍に敗れた大友義統はよしむね大友館から一旦高崎城に逃れ、さらに豊前国龍王城（大分県宇佐市安心院町）に退避しており、室町時代から戦国時代を通じ、大友氏の重要な城として管理・整備されていた。城のある高崎山は標高約六二八mで、別府湾にせり出すように吃立する。推定所在地に北面、別府湾を前にして立つ

と、高崎城はまさに左手に聳える「孤城」である。

最後に、右に流れる「二水」であるが、先に工藤寛次説を紹介した部分で述べたように、「戦国府内絵図」C類に描かれている大分川の本流と分流のことである。大分川が下流域で二筋に分かれていたのは戦国時代に限ったことではない。先に、府中の範囲を確定させる考察の中で、勝津留の範囲を示したが、勝津留の北限は大分川分流であった。勝津留の開発が始まった平安時代後期、すでに大分川は本流・分流の二筋に分かれており、分流は河口付近で西に向かって大きく湾曲していた。従って、雪舟が天開図画楼を設けた室町時代も大分川は二筋に分かれていた。

以上、天開図画楼の所在地が現在の大分市大手町三丁目付近であっても、呆夫良心『天開図画楼記』が記す四方景観に合致する。

本稿で提示した新たな所在推定地がこれまで研究者が提示してきた推定地と大きく異なるのは大分川分流河口付近という平地であることである。これまでの諸

説は、場所は違っても、すべて高台上に推定している。

しかし、呆夫良心『天開図画楼記』には天開図画楼が高台にあるとは一言も書かれていない。にもかかわらず、これまで研究者たちは、ある意味、高台を前提に所在地を推定してきたといわざるを得ない。その一因に、雪舟が後に山口に設けた画室・天開図画楼が高台にあったことがあげられよう。沼田頼輔が上野台地を「小高き丘陵で眺望の極めて宜しきところである」と述べているように、これまでの研究者は豊後豊府の画室と同じ名を持つ山口の画室が高台にあったことを念頭に、『天開図画楼記』の冒頭にある「勝地を豊府西北の隅に相攸し」の「勝地」を見晴らしがよく景色のよいところと解釈してきたのではなからうか。しかし、先述したように、勝地とは「景色のよいところ」と「最も適した場所」であるが、「眺望がよい」、「見晴らしがいい」との意味までは含んでいない。平地であっても、「景色のよいところ」、「適した場所」であれば勝地としてなんら不都合はない。

また、「天開図画楼」という名は見晴らしの良い土地に建てられた亭につけられるもので、宋時代の姚氏が築いた亭にその名を賦したのが早い例とされている」との指摘⁽¹³⁾や「天開図画」とは中国の亭（眺望の開けた優雅な楼台）のこと」の指摘⁽¹⁴⁾がある。これらの指摘では「天開図画」自体が「見晴らしのよい土地」、「眺望の開けた場所」の意味を含んでいることになる。しかし、「天開図画」の字義は天開が「天がひらける」、

図画は「絵画」である。そして、「天開図画」で「天が描き出す絵画」＝美しい自然を意味するとされる⁽¹⁵⁾。

宋時代の詩人・姚伯愿が現在の江蘇省（中国東部。省都は南京市。上海市に接し、蘇州市・無錫市などからなる省）に亭を設けるにあたり、名を王正己に請い、「山谷天開図画即江山」と誦したところから、天開図画亭と名付けたという⁽¹⁶⁾。姚伯愿の亭が高台にあったかも知れないが、この逸話は、王正己がその周囲の風景を天が描き出した絵画のようにすばらしいと称賛したことから亭の名を付けたことを示しており、「天開図

画」自体に眺望の開けた場所との意味があるとはいえないであろう。

「勝地」、「天開図画」いずれにも、「眺望がよい」、「見晴らしがいい」との意味は一義的に含まれておらず、豊後豊府の天開図画楼が平地にあったとする自説の否定要因にはならないと考える。

さいごに

「はじめに」において、雪舟が豊後豊府に設けた天開図画楼の所在地を考察するには、室町時代、府中と呼ばれていた豊後国中心部の範囲の確定、所在地を示す唯一の史料である呆夫良心の『天開図画楼記』を虚心に解釈することが重要と述べた。本稿において、この考え方に基づき、考察を進めてきたつもりである。結論を提示する過程で、論旨が煩雑となり、分かりづらい点が少なからずあったことは、文章力のなさと反省している。それは「虚心に解釈すること」に徹したことによるものであり、ご容赦いただきたい。

本稿が天開図画楼の所在地として提示した場所は、これまでの研究者がだれも指摘してこなかった場所である。しかし、呆夫良心ばいふうりょうしん『天開図画楼記』を虚心に、忠実に解釈すれば、自ずと、当時の大分川分流河口付近との自説にたどり着くと考えている。

(大分市美術館 美術振興課長)

註

- (1) 例えば、『大分県史 中世篇Ⅱ』(大分県 一九八五年)、
『大分歴史事典』(大分放送 一九九〇年)
- (2) 『京都国立博物館所蔵 日本美術の至宝展』図録(大分市美術館・京都国立博物館 二〇〇四年)の解説は「天開図画楼の」場所がどこか特定できない」とし、鹿毛敏夫「雪舟・狩野永徳と豊後大友氏―絵師からみた『大友文化』―」(『大分県地方史』第一九四号 二〇〇五年)において、「天開図画楼の所在地については二つの説があり、現段階で所在を特定することはできない」としている。
- (3) 吉野光・中島純司『水墨画の巨匠第一巻 雪舟』(講談社 一九九四年)、島尾新『もつと知りたい 雪舟 生涯と作品』(東京美術 二〇一二年)
- (4) 『古画備考』中巻(思文閣出版 一九八五年再版)
- (5) 『大分縣郷土史料集成 地誌篇』(復刻版 臨川書店 一九七三年)
- (6) 『京都国立博物館所蔵 日本美術の至宝展』図録(前

掲註(2)

- (7) 初版…斎藤玉英堂 一九一二年。復刻版…論創社 二〇〇二年。
- (8) 『史蹟名勝天然記念物調査報告書 第九輯』(大分県史蹟名勝天然記念物調査会 一九三一年)
- (9) 『中世大友再発見フォーラム 南蛮都市・豊後府内都市と交易』(大分市教育委員会・中世都市研究会 二〇〇一年)
- (10) 『大分県地方史 第一〇号』(大分県地方史研究会 一九五六年)
- (11) 『大分県史 中世篇Ⅱ』第六章第三節(大分県 一九八五年)
- (12) 大友館研究会編『大友館と府内の研究 「大友家年中作法日記」を読む』第三章第一節(東京堂出版 二〇〇七年)
- (13) 『京都国立博物館所蔵 日本美術の至宝展』図録(大分市美術館・京都国立博物館 二〇〇四年)
- (14) 鹿毛敏夫「雪舟・狩野永徳と豊後大友氏―絵師から見た『大友文化』―」(『大分県地方史』第一九四号 二〇〇五年)
- (15) 山口県立美術館ホームページ『雪舟への旅 連載東アジアを歩く 第五回山口』
(http://www.yma-web.jp/exhibition/special/archiv_e/sesshu/tour/asia05.html)
- (16) 「宋詩紀事儀真県志」(『大漢和辞典』天開図画項)